





日本文学全集  
46

# 三島由紀夫

(二)



花ざかりの森・青の時代・沈める滝  
獣の戯れ・英霊の聲・憂国・十日の菊



# 三島由紀夫 (二)



カラー版日本文学全集 46

1970©

昭和四十五年十月二十日 初版印刷

昭和四十五年十月三十日 初版発行

定価 七五〇円

著者 三島由紀夫

発行者 中島隆之

印刷者 草刈龍平

装幀者 亀倉雄策

本文印刷 中央精版印刷株式会社

口絵印刷 凸版印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

製函 加藤製函印刷株式会社

本文用紙 本州製紙株式会社

クローズ 日本クロス工業株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三丁目六番地

電話 東京(292)三七一一(大代表) 振替 東京一〇八〇二

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0393-331146-0961

目次

三島由紀夫(二)

花ざかりの森	.....	五
青の時代	.....	二五
沈める滝	.....	七
獣の戯れ	.....	一九
英霊の聲	.....	二五
憂 国	.....	二七
十日の菊	.....	三三

注 積 小久保 実  
 年 譜 山口 基  
 解 説 榎本 真介  
 巻頭写真 宗谷 真爾  
 色刷挿絵 沈める時代 藤田 吉香  
 沈める滝 司 玲  
 沈める滝 鴨居 玲  
 沈める滝 中村 直人  
 沈める滝 国英の聲・憂

三島由紀夫  
(二)



# 花ざかりの森

かの女は森の花ざかりに死んで行った  
かの女は余所にもっと青い森のある事を知っていた

シャルル・クロス散人\*





## 序の巻

この土地へきてからというもの、わたしの気持には隠遁ともなづけたいような、そんな、ふしぎに老いづいた心がほのみえてきた。もとこの土地はわたし自身とも、またわたしの血すじのうえにも、なんのゆかりもない土地にすぎないのに、いつかはわたし自身、そうしてわたし以後の血すじに、なにか深い聯繫をもたぬものでもあるまい。そうした気持をいだいたまま、家の裏手の、せまい苔むした石段をあがり、物見のほかにはこれといて使い途のない五坪ほどの草がいちめんいっめんに生いしげっている高台に立つと、わたしはいつも静かなうつけた心地といっしょに、来し方へのもえるような郷愁をおぼえた。この真下の町をふととら抱いている山脈にむかつて、おしせまおしせまっている溝が、ここからは一日にみえた。朝と夕刻に、町のはずれにあたっている船着場から、ある大都会とを連絡する汽船がでてゆくのだが、その汽笛の音は、ここからも奇きだたしいくらいはつきりきこえた。夜など、灯をいっばいつけた指貫さしぬきほどな船が、けんめいに沖をめざしていた。それなのにそんな線香ほどに小さな灯のずれようは、みていて遅さにもどかしくならずにはいられなかった。

いくたびもわたしは、追憶などはつまらぬものだとおもいかえしていた。それはほんの一、二年まえまでのことである。わたしはある偏見からこんなふうに考えていた。追憶はありし日の生活のぬげがらにすぎぬではないか、よしそれが未来への果実のやくめをする場合があ

ったにせよ、それはもう現在をうしなつたおとろえた人のためのものではないか、なぞと。熱病のような若さは、あつた考えに、むやみと肯定をみだしたりしがちのものである。けれどもしばらくたつうちに、わたしはそれとは別なかんがえのほうへ楽に移っていった。追憶は「現在」のもっとも清純な証あかしなのだ。愛だとかそれから猥身わうしんだとか、そんな現実におくためにはあまりに清純すぎるような感情は、追憶なしにそれを占つたり、それに正しい意味を索めたりすることはできないのだ。それは落葉をかきわけてさがした泉が、はじめて青空をうつすようなものである。泉のうえにおちらばつていたところ、落葉たちは決して空を映すことはできないのだから。

わたしたちには実におおぜいの祖先がいる。かれらはちやうど美しい慣れのようにわたしたちのなかに住まうこともあれば、齒がゆく、きびしい距離のむこうに立っていることもすくなくない。

祖先はしばしば、ふしぎな方法でわれわれと邂逅する。ひとはそれを疑うかもしれない。だがそれは真実なのだ。

木洩れ日のうつくしい日なぞ、われわれは杖を曳いて、公園の柵しほりに近よつたりするのである。門をはいると、それがごく閑散な時間かなにかで、人かげのみえぬひろい場所が、たぐない懐しいものに思われたりするであろう。ふだんは杖なんぞ持つことのないくせに、なんの気なしに携えてきたそれは、遠い昔、やつとこのことで、一秒か二秒のあいだ触らせてもらった家宝の兜の感觸かふくなんかを、ふつとおもいださせてくれたりするだろう。そんなときだ。

遠くの池のほとりのベンチで、(それは池の反射や木洩れ日のために、たぶんまばゆく光っているのだが)だれかが行儀よく身じろぎもせずせずに憩やすみんでいる。ふとその人がこちらをむく。するとなぜか非常に快活な様子で立ち上つて、ほとんど走り出さんばかりに、木洩れ日をぬつてこちらへ近づいてくる。われわれは子供っぽいまでの熱心さで、あたかも予期していた絵のようにその人をみつめているにも不

拘くわうある距離までくると魚が水の青みに溶け入って下くだるように、急激にその親しい人は木洩れ目に融けてしまふ。——しかしおそらく、このわたしの告白から、ひとは紋付と袴はかまをつけた大まかな老人を想像するかも知れぬ。いや、する方が本当ほんとうかも知れない。が、そうした場合は、却かえりってすこぶる稀まれなことだと申してよい。なぜなら「その人」は、度々、背広をきた青年であったり、若い女であったりするからだ。と云って思い過ぎてはいけない。かれらはみな申し合わせたように、地味な、目立たない、整った様子をしている。たいへん遠くからわれわれに微笑をつたえてくる、まるでわれわれのなかにそうした微笑だけをひきつけてみせる磁石でもあるかのように。その微笑は、だが切ない、憧れにも近いようなひたむきさを見せている。……

祖先がほんとうにわたしたちのなかに住んだのは、一体どれだけの昔であつたらう。今日、祖先たちはわたしたちの心臓があまりにさまざまのもので囲まれているので、そのなかに住いを索めることができなない。かれらはかなしそうに、そわそわと時計のようにそのまわりをまわっている。こんなにも厳かんしいものと美しいものとが離ればなれになつてしまった時代を、かれらは夢みることさえできなかつた。いま、かれらは、天と地がはじめて別れあつた日のようなこの別離を、心から哀あはしがつている。厳かんしいものはもう粗鬆そしょうな雑ばくな岩石の性質をそなえているにすぎない。それからまた、美は秀麗な奔馬である。かつて霧きりふりそそぐ朝のそらにむかつて、ただけしく唸うなくまに、それはじつと制せられ抑えられていた。そんな時だけ、馬は無垢でたぐいなくやさしく、さうして何度もたち上りながらまっすぐに走っていた。もう無垢ではない。ぬかるみが肌をきたなく染め上げてしまつた。ほんとうに稀まれなことではあるが、今もなお、人はけがれない白馬の幻をみるのがないではない。祖先はそんな人を索めている。徐々に、祖先はその人のなかに住まうようになるだらう。ここにいまじくも高貴な、共同生活がいとぐちを有つのである。

それ以来祖先は、その人のなかの真実と壁を接して住むようになる。このめまぐるしい世界にあつては、ただ弁証的手段でしかなかつた真実が、それ本来の衣裳を身につけるだらう。いままで、怠惰であり引っこみ思案であつたそれが、うつくしい果敢さをとりもどすだらう。祖先はじつと、そのあらたな真実によって、はぐくまれることを待つだらう。まことに祖先は、世にもやさしい糧で、やしなわれることを希ねがっている。その姿ははたらきかけるものの姿ではない。かれらは恒に受動の姿勢をくずすことがないもののきわまりの、——たとえば夕映ゆふえいえが、夜の侵入を予感するかのように、おそれと緊張のさなかに、ひとときわきわやかに離はなれり那な——、あるがままのかたちに自分を留め、一秒でもながく「完全」をたもち、いささかの瑕けがれもうけまいとする、——消極がきわまつた水に似た緊張のうつくしい一瞬であり久遠の時間である。

## その一

うまれた家では、夜おそくよく汽車の汽笛がひびいてきた。天井板のこみいった木目におびえて、ねつかれない子どもの耳に、それが騒音というにはあまりにかほそい、何かやさしい未知の華やかさのよういきこえてきた。ちょうどそれは、おもいがけないとおくでさざめいてる都の夜のようなものである。秋霧が一团の白いけもののように背戸をとおりぬけてゆくのがきこえてきた。それは音のない火花のようにほろほろではじけてひろがって行つた。そのうすい霧のむこうで、桔梗ききやうは麻蒲団あしづの模様のようにさびしく白ばんでいた……。

子どもはひとり寝の夢の隙間に、けんめいにはいりこもうとした。そこでは現実の音がゆめの姿をしているのであった。すると汽笛は、

——花野のひとひを笛のような音を立ててのがれてゆく秋風のように思われた。雪のふりはじめた北国の小駅を、——たくさんの青い林檎の箱やもつとおい海からはこんできた鮭なぞを載せて、その小駅を出、(客席のあいだにコンロをおき、襪巻をした娘や耳覆のきのラッコ帽子をかぶった老爺などをのせて)——早咲きの山茶花の村や、煙りまじな、さびれた工場町やを哀しみに目をむけず、自分勝手にはしてゆく冷淡な汽車のありさまを、すぐさま心にうかべた。それに重って、黒い焼木の峠のむこう……霧のなかで、線路の一部がうす白く光っている上を、巨きな機関車がなんども喘息の発作をつづげながら発車するところが見えるのであった。その霧は、線香のような匂いがした。……

父は町へつれて行くことに子供ののぞみどおりにしばらく線路のそばの柵に立ってくれた。線路のむこうでは赤い夕日の残りのようなあまたのネオンが、黒い背景のなかでわがままな星のようにまわっていた。

象がおるたびに歓呼する南国の人のように、不愛想に電車がゆきちがうたびに、子どもは父の腕のなかで跳ねてわらいながらめちやくちやに手を叩いた。……

そのころ子どもはよく電車のゆめをみた。ひろい整とおおきな鉄門と煉瓦塀との、家構は大きかったが、門前には黒っぽい細道がかはっていた。ゆめのなかではその路を電車がとおるのだ。どこともしれない前の世の都のようなあかるい大通り……(パケツでぶちまけたような光があふれている)……から、お客も運転手もいないその電車は闇の小路へまっしぐらにすすんできたのだ。子どもはあきらかに、病人の歯ぎしりのようなレールのきしりをきいた。闇はテントのようにふくれ、窓にむなしい灯をあかあかとつけた電車のまわりには、ぐるぐるまわすと色のついた火花の出る、あのブレッキ製のおもちゃの火花

のような、赤やみどりの星がゆれていた。おもちゃの汽車をつくりのその古い市内電車は、(電車がとおる由もない細路の)門のまえを、すてきな響きをあげて走りすぎてしまった。……子どもは耳をすました。もうきこえない。夜汽車の、またとおい汽笛がする。だがいましがたすばらしい勢いでかけていった市内電車は、家の左の坂を若い流星のようにかけおりて、その反動で今ごろは、夜は灯したきいろい油障子を閉している火の見小屋の角を、まっしぐらに曲ってしまったのであろう。子供はいつか目をさましている。柱時計の秒針が吃つたさざなみのような音を立てている。しばらくの間へやのなかの置物が、みしらぬ高貴なもののようにみえている。時計がなる。その音への注意が、また子どもを夢のなかへとり戻してしまふ。……

この丈たかい鉄門のまえに立つとき、そのなかに営まれている生活を想像することに、だれしもはげしい反撥をかんじずにはいまい。唐草紋様の鉄門はきつちりくぎられた前庭と鬼瓦のような玄関だけをのぞかせていた。その玄関の棟が門に立つ人にむかって、威丈高な、ほとんど宿命なあらがいをいどんでいた。煉瓦塀はやしきの内部のすべてを人の目からさえぎり、花の匂いだの、こわだかな笑いごえなどまで、その湿つぽさのなかに吸収した。

父は母屋にはふだんはいなかった。ひろい三棟の温室のわきへ、いおりのようなものをたててそこにいた。母屋とそのいおりの間には、海原のようにお花ばたけだの菜園だの、葡萄や梨をうえた果樹園だのがひろがっていた。夏になると葡萄園のうえには蜂が雲のようにむらがついていた。ちかよつても或る蜂はじつと葡萄のひろい葉にやすんでいた。わたしは庭のあちらにまぼゆい夏の雲がたちあがり、そのために蜂の羽や毛がするどい黄金の針のように光るのを、それからやはり金いろをした巨きな目のなかに、かわいらしい夏雲が瀧つてゆくのをみた。……

母屋には祖母と母がすまっていた。わたしは幼な心にも父と母との

別居をいぶかつたが、夜祖母が痛みつかれておいら、わたしもすつかり寝息をたてているとき、(ほんとうはちらちらと目をひらいては母の動静をさぐっているのだが)母が庭下駄をはいて、あかるい果樹園の月夜を、ずつとこちらまで長い影をひきずりながら、父のいおりへといそぐのを見た。そんなとき——これはわるい神経だろるか——わたしはむしろよこばしいような愉快な気分、きづかない母のうしろ姿を眺めやつたのみならず、しいておとなしくしていようと、殊勝な気持のほかには何も抱かなかつた。祖母は神経痛をやみ、座敷をしじゅうおこした。ものに憑かれたように、そのせげがたい座敷がはじまるのである。かの女のしずんだうめがきこえだすと、病室の小さな調度、煙草盆や薬だんすや香炉や、そうしたもののおうえを見えない波動のようにその座敷が漲ってゆく。するとほんの一瞬間、へや全体が麻痺したような緊張にとざされ、それが山霧のようにすばやく退くと、こんどは、へや中が、香炉や小篋や薬籠などが、一様に、あの沈痛な一本調子な呻吟にみだされた。こうした部屋それ自身というものの、うめきやうなりは、おそらく余人には見当のつかぬことであるにちがいない。しかし座敷が、まる一日、ばあいによつては幾夜さもつづくと、もっと顯著なきざしがあらわれてきた。それは

「病氣」がわがものがおに家じゅうにはびこることである。

「薬を注いでおくれでないか、坊や」寝覚めのこえで祖母がそういつた。それは老いへのどからだけ出る、柔和な、たとえはかすれ勝ちの墨の筆跡のような、郷愁的なまでの発音である。だが、無理な姿勢をしようとしかけたので、またそのあとにうめきがつづいた。祖母は胸のついたワイン・グラスでいつも水薬をのんだ。わたしはきちんと膝をそろえて、この大役にほんのすこしばかり緊張しながら、水薬の壺をあけた。いまだにわたしは、コルクの栓が、その役目から放たれた——束縛から解放された瞬間の、へんに間に抜けた乾いた、おもえげどことはなしになにかの兆が感じられる底の、ふしぎな音を立てたのをおぼえている。栓を抜くと、わたしは濃い葡萄酒色の薬液がはいっ

ている壺をかた打けて、そーっとグラスのほうへよせて行った。グラスがきわめてすこしの分量しかうけいれぬことを知っている経験から、そういう徐々な動作は、なにげなくほとんど無意識にされるべきはずなのにこの時わたしはみょうなきこちなさを感じたのを今もおぼえている。——まだ液がながれてこない、まるで全く同色の障害物でもあるように。わたしは日に透かしてしずかに壺をゆすった。なんにもはいってはいない。もう一度かたむけた。やっぱり流れてこない。ふとわたしは気がついた。ある一定のあやうい角度までくると、わたしの手頭の骨が器械のように固定してしまうのだ。ちょうどそれ以上ひらかなない戸の蝶番がかつきりくいちがうように。わたしはそれを一つの迷信のようにおもう。ばかばかしくかんじる。けれど、それとは正反対にふいに抑えきれぬほどきどきしはじめた。こんどは手のふるえるのがあぶなくて容易に壺をかたむけることができなくなつてしまった。そのとき、わたしはありありと壺のなかに一匹の「病氣」をみたのである。彼は、ごく矮さく、そろえた膝にあごをのせてねむっていた、自分のからだを洗っている薬の海にはからきし気づかぬかのように。

母屋の果てのふるい部屋々々へ、わたしは兜かぶとやよろいや黒い毛すねのような太刀などをみにいった。その帰り、婢はくりやへゆくほうの廊下でわたしと別れて、もうここからさきはおこわくはいらっしゃいますまい、と言いながらむこうへ行つて了う。ほんとうはこれからがわたしにいちばんこわいのだ。しかしそれをいうのがわたしははずかしくて、哀訴ともなるともつかぬようなおもいをこめた目つきを投げけるのがつねだ。それなのに婢はふりむいてくれない。三、四間さきの祖母のへやまでのあいだ。わたり廊下がひとつ。曲りかどが三つ。——こわさにふるえながら、昼間のよく光った風がとおりすぎる暗い廊下を、ちょうどその風とおんなじにわたしが走つてゆく。と、角々で(ひとりとは必ず)「病氣」に出会つた。それもあたふたといそいでいる。わたしよりずっと長身だ。顔のないのもあれば、顔のある

ものもあつた。顔のあるもののみひとり、——それはつみもなくわらつていた。彼はまた「死」と近しくない「病氣」にちがいない。彼はきつともつと「死」に近い。「病氣」のところへ、なにかたよりをもたらしにゆくにちがいない。ある日わたしの右の小指がほんのすこしばかりそのぬらりとした見えぬものにさわつて了つた。わたしはその日、ひまさえあればその小指をあらつていた。あんまりあらつていと指のさきがいいたしくふやけて、ついぞ注意したことのない指紋が、へんに清潔に、はつきりとみえてきた。その指紋が、わたしにねむられぬ部屋の天井の木目だの、それから「病氣」が常用する、象形文字だのをおもわせた。

母は固い人となりの女だった。かの女はじぶんの言動に反省をもとめたことがなかった。あたかも蜜蜂がじぶんのとんできたみちを反りみないように。だが蜜蜂はけつして巣へもどるみちをあやまたない。母はしばしば、傍目にはおろかしくさえおまわれるほど、それを間違えた。だからかの女には真の意味での追憶がなかった。かの女の想いがむかしにさかのぼるためにはあまりのおおくの言いわけが入用だった。——かの女は母の性には欠くるところなかつたであらう。だがかの女は「当世」の女である。かの女も亦、あの、美と厳しさとのかなしい別離、みおや達のむねせまる挽歌をきかなかった。

母にわたしは、たつといつもの末の、うらがれではない、人造の葉を鮮やかにとりつけた——衰頹でありながらまだせん方ない意欲にあふれている、そんないくらかアメリカナイズされた典型をよんだのである。それはどのみち、衰頹のひとつには相違なかつたであらう。しかしもつとしぶとい、いきいきとした繁榮の仮面にあまりにもよく似合つた。かの女はじぶんのなかにあふれてくる、真の矜持の発露をしらなかつた。もはや貴族の瞳を母はすてたのである。それをば借りもののブルジョアの眼鏡でわずかにまさぐつた。が、この眼鏡はあくまでも借りものだ。母はその発露に、「虚栄心」という三字をしかよま

なかつた。虚栄心——ひと昔まえまで日本にこのようないやしい文字はなかつた。わたしはそれをアメリカ語だとかんがえている。……扱て母は、それ以来すべてに「虚栄」という幻をみた。この幻は、いつも高貴なものを、もつとも卑劣な、にくむべき残忍なやり方で抹殺した。母は虚栄にきびしい目をむけたのではなく、さいごまで虚栄の抽出にきびしい目をむけたのであつた。虚栄みずからは甘い目しかもたない。しかもその図太さがすべての高貴のきびしい目に優にはむかつた。

「正しいこと——あたりまえなことをやっているのを、だれにみられようが、なんといわれようがかまひはせぬ」……母はこんなことをば口癖にしていたけれども、まことの矜持はどうしてこんなことを言い得よう。このような暴露主義や独断が、いつから「正当な」位置をもちはじめたのであらう。いうまでもなくそれは、あの別離の日——挽歌の日からである。真の矜持はただけしくない。それは若笹のように小心だ。そんな自信や確信のなさを、またしてもひとびとは非難するかもしれない。しかしいとも高貴なものはいとも強いものから、すなわちこの世にある限りにおいて小さく、ゆうに美しくいものから生れてくる。確信や自信などという不純なものがそこに含まれよういわれは決してありはせぬ。

母は父に勝つた。

父は——(彼は種々の植物の品種改良やたぐいまれな生物の飼育に生涯をささげ、さまざまな閑人の協会を組織していた)——母は不満も怒りもかんじなかつた。かれは敗けたからだ。

秋のひとつ日、わたしはこんな父の姿をみたことがある。父は数人の園丁をしたがえ、黄ばんだ、はなだ色の蟲のなかに、じつと空をあおいで立っていた。父の姿は、それはひよわで貧弱でさえあつたが、豊饒な酒のような秋の日光のしたで、年旧りた、飛鳥時代の仏像かなにかのように望まれた。その時、紫の幔幕のようにうつくしい秋空いっ

ばいに、わたしはわたしの家のおおどかな紋章をちらと見たのである。

## その二

わたしはわたしの憧れの在処を知っている。憧れはちょうど川のようなものだ。川のどの部分が川なのではない。なぜなら川はながれるから。きのう川であったものはきょう川ではない、だが川は永遠に在る。ひとはそれを指呼することができる。それについて語ることはできない。わたしの憧れもちょうどこのようなものだ、そして祖先たちのそれも。珍らしいことにわたしは武家と公家の祖先をもっている。

そのどちらのふるさとへ赴くときも、わたしたちの列車にそうて、美しい河がみえかくれるように。わたしたちの旅をこの上もなく雅びに、守りつけてくれるように。ああ、あの川。わたしにはそれが解る。祖父たちからわたしにつづいたこのひとつの默契。その憧れはあるところでひそみ或るところで隠れている、だが死んでいるのではない、古い籬の薔薇が、きょう尚生きてるように、祖母と母において、川は地下をながれた。父において、それはせせらぎになった。わたしにおいて、——ああそれが滔々とした大川にならないでなにならう、綾織るもののように、神の祝唄のように。

祖母の死後、ふるびた唐びつから照明夫人の日記教帖と、古い家蔵本の聖書とがみいだされた。聖書は蠟燭入りの漆の文庫におさめられ、錦でのおおわれていた。日記は都合五帖。小松と銀砂子の見返し。

とびらに、某上人の筆になる二、三行の聖句がかきそえてある。上人はスペインにうまれ南方のとある植民地にそだった人である。その異國のことばは、わたしには判読することができない。しかしその発音が、あの古風なびいどろをこすり合わせたような、そんな透きとおったひびきを持つもののようにおもわれてならぬ。

夫人自身はわたしたちのとおい祖先だ。かの女はもえるような主の御弟子であった。そうしてかの女の夫も。夫の城は南国のあるいりうみの近くにであった。わたしの今すまっているこのわびしい住居のように。

夫人の日記は日づけがたしかではない。五月がふいに八月にとんでいる。また八月十日のつづきにかかれた十六日が、十一月の十六日であったりする。いうまでもなく日づけのない場所さえある。かの女の夫は病弱で、その介抱に寧日ないありさまだったから。またこの城にもただよっている、萌黄の、紫金の、灰色の、さまざまな光りをもった空気が、かの女の従順な時間を磨滅せずにはいかなかったから。

ある夏のひとひの、かの女の日記にはこんなふうにしるさされている。

その日、屋にいとときちかく間のあるころ、かの女の夫はやすらかにねむっていた。しずかな病室ですべてがまどろんだ、屏風の寒山拾得や、漆と蒔絵の調度や、あざやかな墨縁や、それから城主のしとねのわきに、おぼろげに彼を見成っていた彼の「病氣」までも。……夫人はそうしたほんのひととき、おもくらしい哀しみふかい介抱からときはなれた。かの女はそばかえに侍っているようにいつけ、暗くひやかな廊下をぬけ、その上方から来るひかりが廊下の一部分をほのかにあかるませ、その上方をみ上げるとき天上か何かのような明るい光がのぞかれる階段を、つめたい音をきしませてのぼった。

櫓の手摺に倚るとはじめて、季節のすがたと季節の温度がみえた。

しじゅうつかわなないため埃のしみた柱や壁を、日は烈しく、そんなものにも新鮮なあじわいを与えくるくらい、ほがらかに照らしていた。城のはるか下方に城門がかすかに見え、そこからならかな傾斜をみせて町が、——洪水のとき、さまざまの破片が一しよくたになり窄い路にあふれにあられて、どこか狂奔してゆくように——黒く低い折り重なった屋根をならべて、おなじ傾斜のままずっと海まで下っていた。屋根のあるものは烈日に漆器のようにかがやき、町のはずれには黴ぼんだ松林がうちつらなっていた。そのむこうにくすんだおだやかな海が見られた。海のあたりはひどく曇っていて水平線は見えなかった。そのあたりだけ、湿った砂地のような層になって、雨雲がじつとかさなっていた。空耳であったかもしれないけれど、夫人はそこから、遠雷のとどろきさえきこえてくるようにおもわれたのである。じぶんの沈んだうれしい気持が、その雨雲にそっくり映ってでもいそうな思いと、雨雲のひろがりとしょにそのうれいのひろがる心配とが、夫人の目をその風景からそむけさせたのかもしれない。かの女はその手摺からいて、ほんたいがわの手摺の方へあゆみよった。城はひろやかな山ぶところのような位置にあたっていたので、その手すりの正面は柔和な山へとむかっていた。正面の山はやや遠かったが、右手には丘のようなゆるやかな山が、親しいものによりそうように迫ってきていた。

た。空気がすみきってこんなときにこそ見しらぬ遠さに煙っている山や、うすら青い海のおくまで、手がとどきそうにおもわれた。あらゆるものに触れられそうなふしぎな奢りの懐い、それがしずけさのなかにほのぼのともえ立ってきた。夫人の、やつれた仄白い顔が、つねにないはればれしい怡びの色をこのときうかべていたことはうたがわれない。その羽二重のしとねのようにふつくらした右手が、胸にさげたいぶし銀の十字架にそっとふれていたかもしれない。そんな動作が、あるいはかの女自身にああした超自然なよろこびを与えたのであるかもしれない。

かの女は思い起していた。あれはまだ夫がすこやかであった去年の春の日のこと、侍女たちとあの凹みのほとりまで若菜摘にいったことを。若菜はもえだしたばかりで、かぼそい葉脈のうきでた草の葉がたとしえもなくやさしく柔らかかったことを。若菜をつみつまあの凹みの下まで来ると、そこには渾というにはあまりに小さな細い垂水がながれ凹みの上にはうつくしい花なぞみえ、こんこんとあふれてくる泉がそこにあることさえたしかだったのに、道の危うさから本意なくひきかえしたあの日のこと。——そうした思い出がいつそうつよく、かの女に凹みをみつめさせた。凹みはちょうど籠のようなぐあいになっていた。

そうした凝視は、いつしか無意識のうちにせつない冀いを含んでくるものである。きよらかな、つかのまにかききえて了いそうなねがいは必ずしもよわいものではない、よしその人にすらきづかれぬ願いであったにしても。そんなたぐいの冀いは、神の意志をなにかのはずみに動かすことがないとはいえぬ。願いはうつくしい羽搏きとしょに、その目的へと翔んでゆく、それによっておこり得るある奇蹟を用意するために。

そんな時だった。夫人はそのくぼみの百合の叢のあいだに、きらきらとおなじく光ったなにかまっ白なものをみた。木の幹のようではあったが、なよやかにびいていた。じつと目をこらしていると、

目の下には幾重にも白い堀やなまこ堀が、きわやかに繞っていた。樹々は火えたち、葉桜いっすいに蟬のこえがこもりがちにひびいていた。山いちめんの緑が、くすんだ色あいと葉のかがやきとの、微妙な調和をみせた。山のいただきあたりには、風がさわいでいるとみえて、樹々の光りがさわがしく崩れで行った。いりこんだ棚のようになあいに凹みになった中腹の一部は樹木がすくなく、そのせいで、草や木の幹までもまはやく光った。光った草のあいだにちらほらきよらかな白に、みえているのは百合であるらしい。微醺の風がふいていった。光ったものは光ったままに、まるで天上の一瞬のよううごかなかっ



(あの翼の作用で)それはすつと近づいてみえるようにおもわれた。夏の日はずこしもかわらずにあまねかかった。蟬がなきしきりむんむんして居そうにおもわれる青い谿間から陵のいただきの木深い森まで、すべてきらきらとあたたかかかやっていた。かの女はもつとよくみようと、まばたきながらあの光ったものをみた。ぼやけてはいるが、どうもそれは丈なすつややかな髪をもった女人であるらしく思われる。裾ながい白衣をきているようである。そのまばゆい白さとわずかにはなれて、おなじ白い光りが点になって見えるのは、もしかその女人が一りんの百合を手しているのではあるまいか。このきんべんはおろか、都へいってもこんな異様な、そうしてけだかい装いをした女人は、見ようにも見られぬであろうものを、夫人はまだその姿に氣をとられて装束の異な点にはおもいが行かない。……

いぶかしくかの女は思う。みしらぬひとのようでもあり親しい人のようでもあり、たしかに一度みたおもかげのようにおもわれてならぬ。むろん貌はさだかでない。きらめきわたっているだけなので。

ふと光りの加減でその女人の胸にもつと燿きのするどいものがちらと見られた。ある直感(ちか)が夫人をうった。そのとき夫人はその女人のかおが、ほのかに笑みひろごり、またとないまなざしでこちらをみつめたようにおもったのである。

めまいのようなのを夫人は感じた。次の瞬間、もう夫人はあの凹みのうえに、なにものも見なかった。うずくような悔いが、しずかにかの女の心に散っていった。ああ、あれは十字架だ。おん母のお胸にひかっただけの十字架だ。夫人はじぶんの胸の十字に手をふれてみた。あたりにちらばう日光のおびただしさをみた。そしてあんな場所からここをぞんだ人の目に映るじぶんの姿を想像してみた。それにあの婦人のみ姿がかさなつた。心のおごりにかの女はみぶるいした。かの女はひざまずきたかった。それなのに、なにかがまだそうさせまいと支えている。すべては夢のようである。いまのかの女の胸には天のみさかえも、よき「こんしんしゃ」の喜びもすべてなかつた。感

動が身ぐるみかの女を包んでいる。感動自身には歓喜もなげきもない。それは生命力のたぐいである。かの女は考えた、人間はひとときにあんなにまですべてのものを看とつて了う。それは畏ろしいことだ、またありがたくも美しいことだと。すべてをみてしまつてもその意味はひとつもその瞬間にはうけとれぬ。やがて心に醸されたものが、きわめておもむろに、「見たもの」のおもてに意味をにじませてくるだろう。だが夫人はおそれる。もしやその意味は真の意味とはもはやかけはなれた縁ない意味ではないのか。次第にかの女は見ることにひたすらであつたあの一瞬を悔いはじめた。ああ、はじめからわたしは限つてひざまずいて祈つていればよかつた。そのときはほんとうの意味がけがれない姿ですみずみまで映つたことである。恰び(はら)がまたその悔いにいれかわる。そうしたいれかわりのたびに、かの女のからだはさまさまなおもいのためにふくらむ、風をいっばいに孕んだ帆のように、とうとう夫人はひざまずいた。祈りが、やがて鳩のようにのために、とうとう夫人はひざまずいた。祈りが、やがて鳩のように四方へとんでいった。禱りは生命力の流露でなくてはならぬ。かの女はもはや人体でなかつた。かの女の生命力はいまかの女自身である。永いりのりあつて身がかるくなると、めざめぎわの子供のように、夫人は怖れおおくあたりをみまわした。すると、あの雨雲が、急な速さでもうやぐらの上までおおいかけていた。みるみる薄曇がそめてゆく風景を、かの女は茫然とながめやつた。耳のあたりでちいさな歌をきいたように思ったので夫人がふりむくと、そこには一匹の蜂がけたるそうにとんでいった。むこうの庇に大きな蜂の巣がかかっている、けぶつた海を背景に蜂がいく匹もその巣のまわりにむらがつているのを、かの女ははじめて知つた。……

この日の日記の、夫人の筆はおどっている。あやしくうち乱れている数行もある。その他の日々は調つた、むしろつめたいくらいな文章がつらねられているのに、この日だけ、文章はかの女自身のもうでは